



た。筋肉のバランス、服の着こなし……こちらで「リアル」についてあれこれ考えても、問答無用で湯浅さんの画力の高さと、赤ペンから伝わってくる「こうしたい」という意志の強さがすごすぎて、それがもう、すべてだったんです。僕たちが作業を進めていたものと、湯浅さんが目指していたものと全く……とまではさすがに言わないですけど、あきらかにシルエット感が違つし、服のディテールへのこだわり、服の構造の理

い表現も使っていくスタイルなのかと勝手に思ってたんですけど、作監打ち合わせの時に「なんか思ってたのと違う作業を求められているのかも？」と分かった感じでしたね。——それってどういふものだったのでしょうか？

わゆるモブキャラにまで猛烈的な修正が入っていました。主人公たちよりも、いかに世界観の説得力をあげるかに、とてもこだわられていた印象です。物語や、主人公たちの存在はファンタジーなんですけど、周りのリアリティはものすごく高める。そのため、デフォルメをさせない。打ち合わせもありましたけど、監督の修正が入った時に、初めてちゃんとして理解できました。「ここまでやるのか！」みたいな感じでしたね。湯浅さんがこれまでやってきたことは全然違うことをやるようになって、これは想像していたよりもハードルの高い作品だぞ！と(笑)。

動きの面でもやっぱり、リアルさを追求してほしいというお話があったんですか？

亀田 そうですね。キャラクターの等身も高めだし、動かし方もやっぱり、今回はあまり極端なデフォルメはなしで、いわゆる残像を線で描いたようなオバケ表現も嫌いなのでなしでと言われました。

——「リアル」な作画といっても、いろいろなスタイルがありますよね。この作品の「リアル」はどういうものだと亀田さんは考えてました？

亀田 どうなんでしょうね……僕自身もそんなに、「リアル」といわれるタイプの作品にそんなに関わってこなかったんです。どちらかというと

絵がマンガっぽくなっちゃったので。だから自分の中でも、どんな絵を描くのが「リアル」なんだろう……って、考えもしました。湯浅さんの作品の中だと、『ケモノヅメ』が一番、今回求められている「リアル」に近いのかなあ、とか。『ポン』の松本大洋的な人物造形の描き方もちょっと勉強してみたりして。それから時代劇で湯浅さんの仕事といったら、『THE 八犬伝』新章(※全7話のOVAのうち、第4話「浜路再臨」で湯浅は作画監督を担当)。これがやっぱり根っこにあるのかな？ と思っ

て、見返したりもしました。でも、あれもリアルではあるんですけど、ちょっとデフォルメが効いてるんで、今回求められているのはこれではないんだろな……と。見はしたものの、『八犬伝』のときの仕事よりも遙か先に行ったようなものを「大王」では求めている雰囲気でした。

——これという正解が最初からあるというよりは、模索していくような。亀田 ただ、僕と中野さんの間で赤ペンチエック」と言っていた湯浅さんの監督チエックがあったんですね。湯浅さんが原画マンからあがってきたレイアウトを線撮したのを見て、スクリーンショットを撮り、その上からアニメーションソフトの赤色のペンツールでグリグリと修正を入れる。その赤ペンチエックを見ると、湯浅さんの求めているものが絵として